



## 全部自分のものにした心

津守 真

二、三歳の幼児の集まりに参加したときのことである。ワーワー泣いている二歳七カ月の女の子がいた。積み木をいっぱい抱え、手に持っている物だけでなく、手が届く範囲の積み木をすべて抱えて、隣に座っている子がひとつ取ると、こんな小さな子にと思うほど強い力で取り返し、派手な声でワーワーと泣くのだった。大声を張り上げるところが私にはとても可愛らしく思えた。私は近寄って一緒に床に座り込んだ。そうすると細かなことが一層よく目に入る。傍らを通るだれかがちよつとひとつ触るだけで泣くので、絶えず泣いているように見えるのである。母親は何とかせねば



と思うらしく、ひとつ分けてあげなさいとか口をはさむのだが、子どもにはそれを聞き分ける余裕はなかった。手の届く範囲の積み木を全部自分のものにする。ことによつて、自分の中に力が溢れてくるように感じるのは、この年齢の子どもの成長の過程として否定すべきことではないだろう。私はその子たちの中に座つて、どの子もそれぞれに満たされるようにと奮闘していた。

そこにF先生が来た。F先生はその子の顔を見ながら、そつと積み木をひとつとり、三個重ねて、アイスクリームと言つた。今度何にしますかと尋ねると、子どもはチョコレートアイスと言う。次にはストロベリーアイスと言う。こうして三つ重ねをいくつも作り、ひとやまの積み木が整理されて、アイスクリームのカウンターのようになつた。他の子が手を出したとき、F先生はアイスクリームですよと言つて積み木を渡した。その子もチョコアイスと言つて他の子に積み木を手渡ししたり、立ち上がつてまわりを歩いた。自分が抱え込んだ積み木が、ごたごたのままではなくて、秩序をもつて整理されたときに、子どもはそれを他人にあげたり、前とは違う展開になつた。三十分ほどの間の成長である。

この成り行きをじつとそばで見えていた女の子がいた。小さい子の世話をしたり、いかにもお姉さんらしく良い子に振る舞つていた。幼稚園に行つて四歳の子どもので、私は一歳の差でこんなに違うものかと感心して見ていた。あとで聞いた話である



が、この日ここに来たとき、この子は何を尋ねられても口をつぐんで指でさして答えていたとのことである。あの子のように自分を表現して泣いてもかまわないと分かったとき、後半では、この子はよくしゃべった。部屋中走り回り、大人に追いかけることをせがみ、大人を相手にいつまでも遊んでいたかった。お行儀よく見えたこの子が、自分の要求をあらわに出して遊んだ。

その翌日のことである。私が養護学校に行ったとき、帰りがけに、一人の子どもが、木の枝をたくさん袋に入れて家にもって帰りたいと言い張っていた。一個の袋には入りきれず、大きな袋を二つと、さらに箱に入れて木の枝を全部もって行きたかった。置いて行かせようとすると大声を上げた。だれかが何本かを見えない場所にそつと移すと、すぐに見つけて、元に戻した。私はそれを見ていて、昨日の二歳の子どもの積み木を思い出し、どうやったらこの子の中でこの木の枝の山が秩序づけられるかを考えていた。そのとき母親が、「この子は、何でも整理がつくとそれでよくなるんです。家にもって帰ってゆつくりやります」と言った。これまでも、この子はビー玉などきれいなものをたくさん集めた時期があり、それを自分のやり方で美的に並べたときに、それを手放せるようになったのを思い出した。これはこの母親の体験からでた言葉である。私は感心した。



この日の木の枝は母親だけでは持ちきれないので、職員が二人で助けて母親と三人で抱えて駅まで行った。帰途、店を見ながら歩くうちに、この子は大きな袋はおいで、木の枝を三本だけ持ち帰ったという。木の枝だけではなく、人間関係を含めて、この子の住む生活の全体がこの子を決して排除していかない、この子も参加して一緒にやって行こうとしていることが分かったときに、この子は木の枝を手放せた。状況の全体がこの子にとって整理がついたのだろうか。

積み木を握りしめて放さない二歳の子どもは、本人は真剣だが大人には可愛らしく見える。大人にとってはそれはたいした価値はない、違った次元から見ているからだろう。子どものかような姿を、自我の成長の過程としてまず肯定的に見ることは重要であると私は思う。最初からこれを否定したら人間の成長そのものがなくなるだろう。その上で、違った次元から見てかわるのである。

大人になると話は違う。大人は日々の生活に直接必要のないものまで欲張って獲得しようとし、手放すまいとしがみつく。大人の取り合いはときに悲惨である。そこで踏みとどまって、「天に宝を積む」ということに思い至ると、厳しい現代の現実にも、裂け目が作られるのではないか。